



諸國
奇談

東遊記後篇



ル 3
475
8

八
三
子





京
西
石
垣
上
田
仙
士
若
下

門
凡
呂
3
卷
2

東遊記後編目錄

一之卷

○ 壺^ふ石^{いし}婦^{むすめ}美^み

○ 書^{かき}信^{しん}

○ 盲^{めくら}曆^{れき}

○ 葡^ぶ萄^{たう}嶺^{りやう}雪^{ゆき}歩^{あゆ}ス

○ 二^{ふた}之^の卷^{まき}

○ 龍^{りゆう}燈^{とう}

○ 三^{さん}馬^ば屋^や

○ 駿^{すま}河^がの^の名^な

○ 新^{あらた}瀉^{ごう}

○ 狐^{きつね}の^の義^ぎ理^り

○ 三^{さん}本^{ぼん}本^{ぼん}卷^{まき}



○ 綿木
○ 蚌珠

三之卷

○ 龍鱗
○ 養軒の詩

○ 四五六谷

○ 齋藤五郎兵衛

○ 北極星

○ 登龍

○ 黄鐘調

○ 箒木

○ 善光寺

○ 諏訪湖

○ 赤松の衣袋

四之卷

○ 熊野御前

○ 羽州鬼

○ 松嶋

○ 舞樂

○ 漢文帝

○ 戸隠山

○ 大魚

○ 塔影

五之卷

○ 手取川風雪

○ 床下の夢

○ 飛根城跡

○ 舍利濱

○ 桐山

○ 廣徳寺門

○ 氣候

○ 名山論

○ 湫先

○ 地氣

東遊記後編目録畢

○大東
○大西
○大南
○大北
○大東
○大西
○大南
○大北
○大東
○大西
○大南
○大北

東遊記後編卷之一

壺ヶ石ゆみ

南谿子著

名多し壺ヶ石のふもと奥州仙臺の東小多賀城の古跡あり
即仙臺より松崎いむられ筋より街道より後小部丁四拾
間入り込所あり南都の事尾松井某享保中小なる者一の
石と立たま明白なり往昔蝦夷王化小服を以奥州と大津ハ
其種類の有ありて竹とともわらく藪ひありしは京師よ
り將軍御遊こりて是は鎮老らるるまき石守將軍とい
ひし居とて松守府といひけま賀城四連の元として府
天平寶字六年大野東人といふ人ゑ賀城に後建し此石碑

戎建四方の路程記一見雲真人小おれと書し今小あつて
 八千年小餘る古物に付て字體を古雅として度厚を換替
 百流もも和英一あり多々城後後後百年とて秀衡法
 守將軍たりし以て平泉小居住してけ城ハ廢し壺碑を
 失くし鎌倉殿の和方ありあひしは名のとけまる遊り
 を母伊達政宗より三代目吉村中將の附けを也方くと為求
 られし今この碑は土中より堀をとりて云れ物の時つふも
 尺多しこのことこの故今年年の後まもつ文字も白そ
 石ありと換ざりしてくは是は石を半流ふと思はれ
 之碑の体自然石ありと文書と順ら方計平とんがこころ

高み六尺厚サ亦三尺基石あり外に堂ありて是は度厚の
 四方に換子しててくのち小換へり石あり赤き葉と
 ち成層するものちやもあらけ碑の事ハ世上の人著く
 志る所もまばらけりくはさるす又或人のいひ壺はつ
 がと漢字ふもあは音烟とて街中の碑は壺碑と
 云と爾雅の注やもあつと云いぐあくん又東の壺碑と
 してのあり是はけあ城とら七八十里計東北の方あり
 の舟造地の近在小壺村といふありて村小壺山といふ
 山ありてけ山は石碑あり村民を碑に敬し社と建て
 是とあり氏林とて姓古よりなり小開く事なり

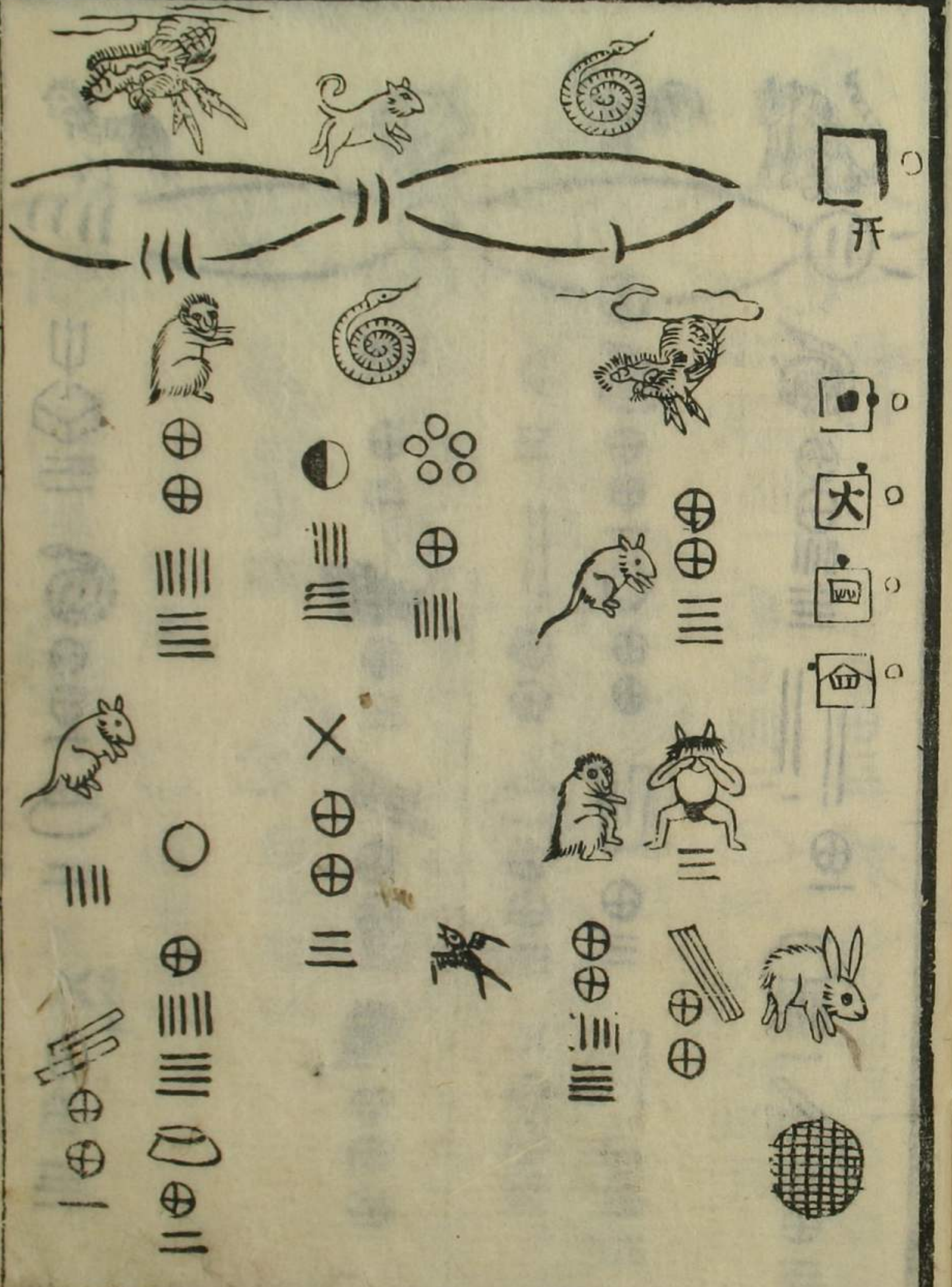
碑面文字あり上方小大字東より西に彫付たりと云
こゝ文ハいろいろありん土民を教して石摺をたふすなり
とゆふに故小志有人びしを年好事の土此碑に摺り傳へん
ことおきし極を方の事取れんと稀少といふことせふ
弘まらず余も此地に生れしやうもそはそ遠近城の
沙は頻りにうらうら雨をききてやとて一友を村もいづす
今小字なきありあつ城の碑西と云大字ありは是れ不討す
東の碑もなきなり又技術系法捕物屋のあふるややは
く海のおらふありときくえそむせの中城といふ所あり又
ありの山系小みちのくハ奥にいくもかとはゆりまの

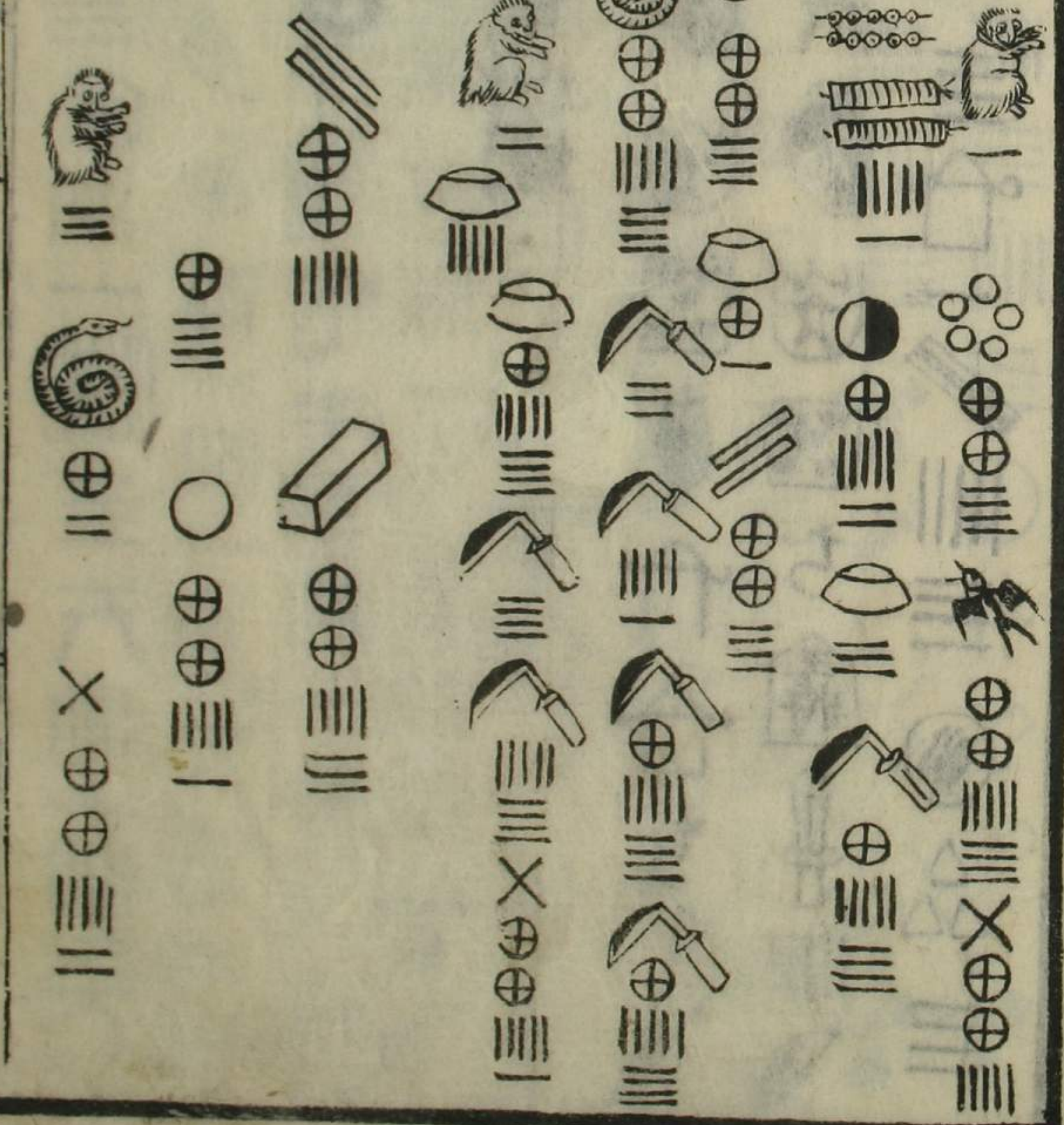
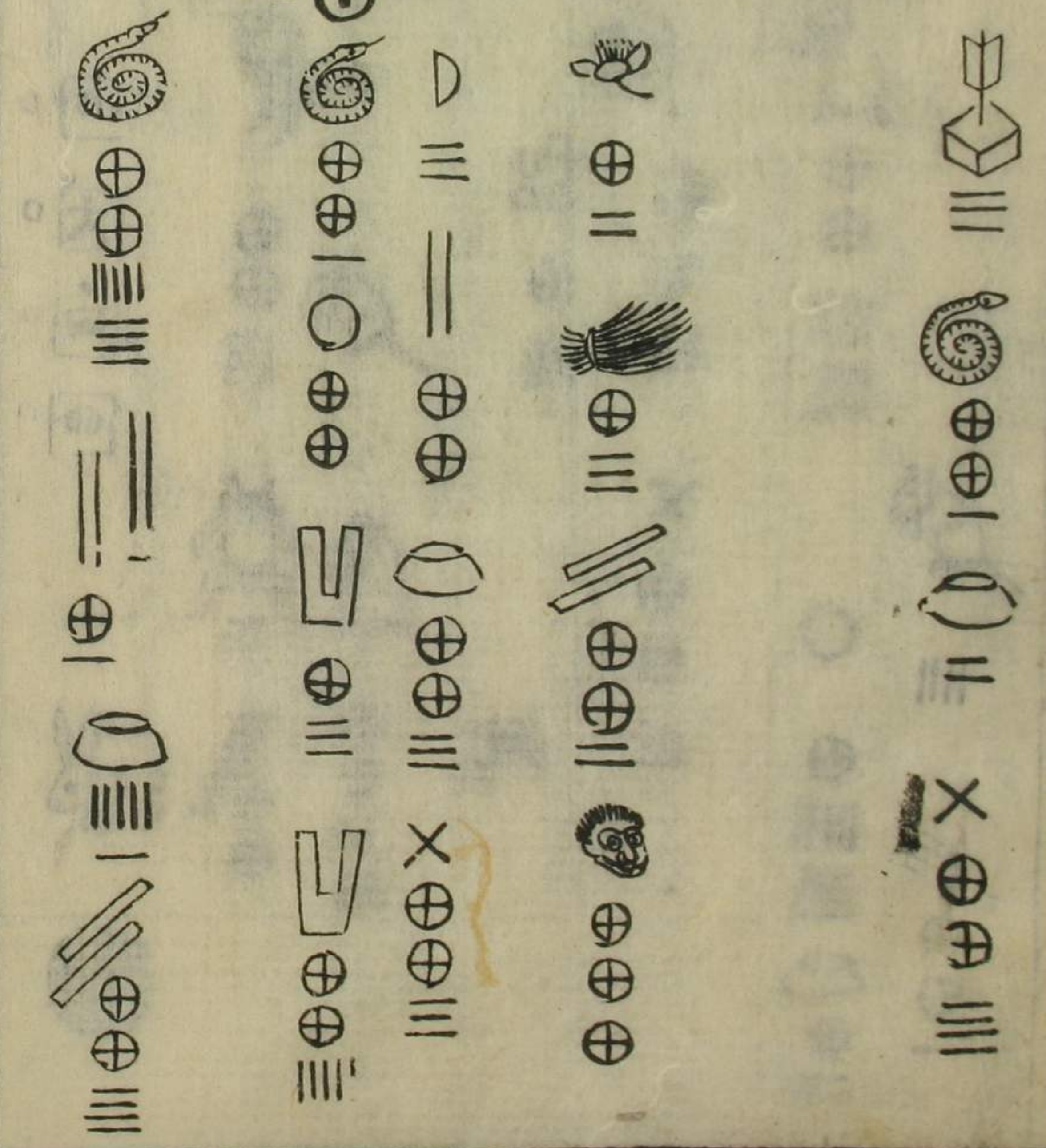
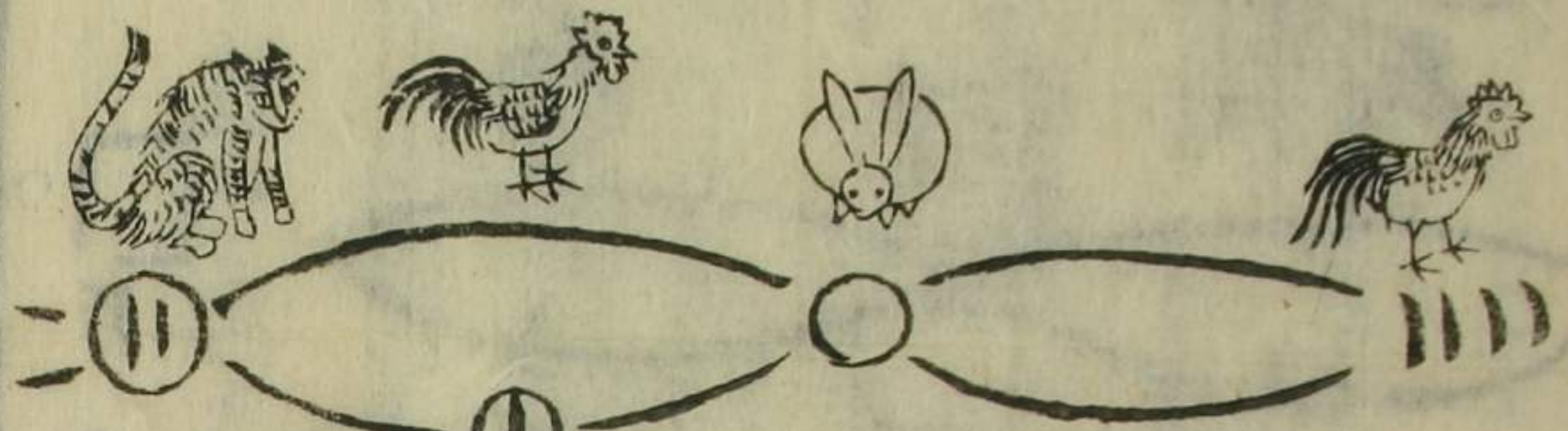
るあまの候風あまのきハ是れ東の毒碑 小や志る
書語

天地開きしころまのころ今の時やど太平なる事ありド
西ハ鬼界屋敷の傍より東ハ奥州の外に流れて号令の所
屋敷より西より住古なる屋敷の傍ハ屋敷國とて天竺の中ふ
中ハ奥州もまは輦美人の領地なるやや程をさばりて夫
人の位ありしとてんと南部津軽邊の地名ハ豊多邊
外に漢通りの村の名ありタツコホロツキ内ニツハ外ニツハイマ
ベツウテツハといふ取あり又田名部の所方小もラコペヲニシ
リヤあととて外村に在るの名ありハ此部とて皆輦美人今

西てもウテツウの邊ハ風俗もや概夫小形して津波の
 人も彼等ハエゾ様といひていやくしむるも余もウテツウ邊
 小形くど南津波邊の村民もたつるハエゾ様ありて只早
 王化小服して風俗言語も改まるる先程より日本人の
 ことつひきり居る事とぞとる故小禮義文華のいも
 岡げざる心の本と南津の邊鄙小ハいらはとどに志す
 して盲唐といふものありとや余り通ひをう街道ハ
 あつたも中しまうと志すハ又般若心経をくてもめ
 ら唐の法を誦するもととるを圖たのこ

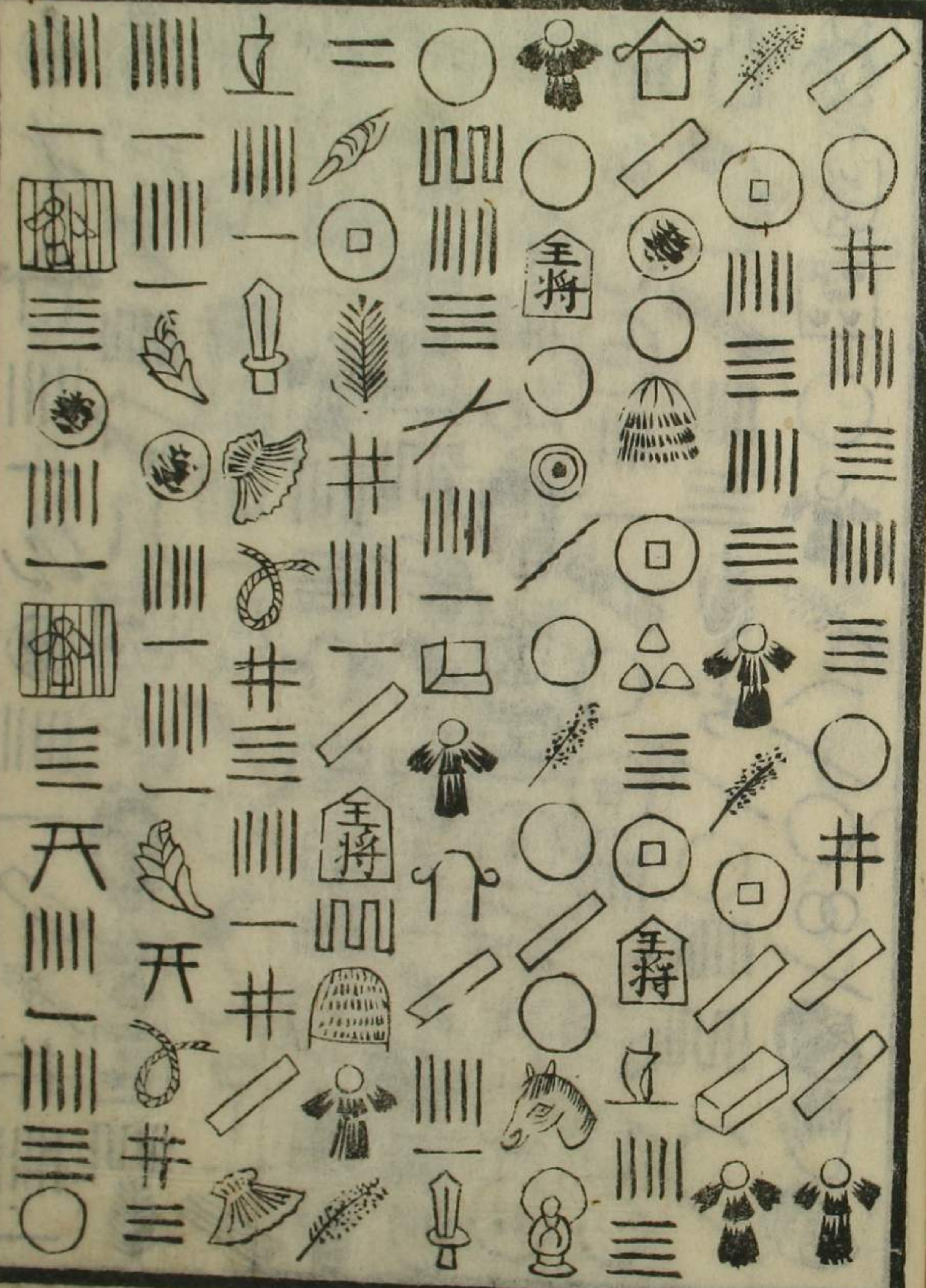
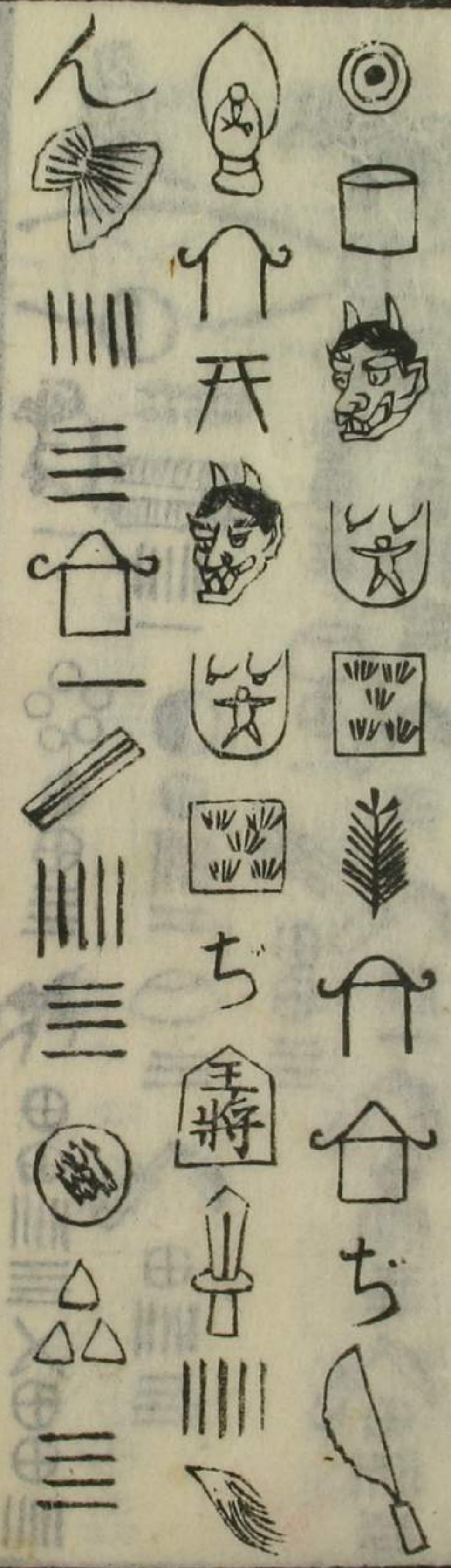
盲唐







盲心經



注解



○東
開 歲徳之



○東
此方を向ひて
本所不物



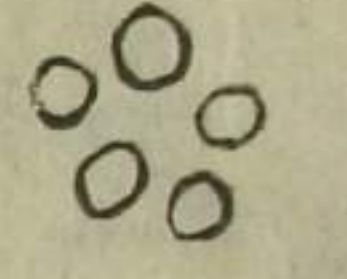
卯



庚申



節分



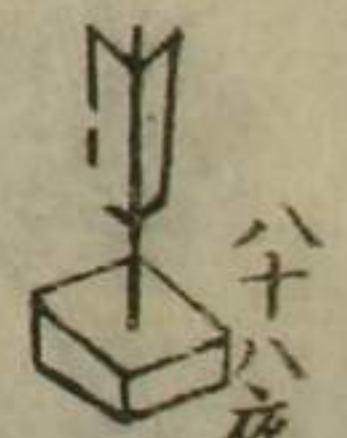
彼岸



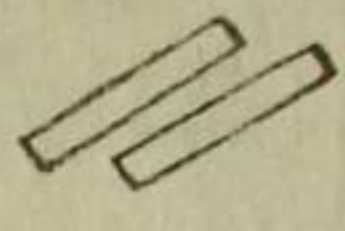
社



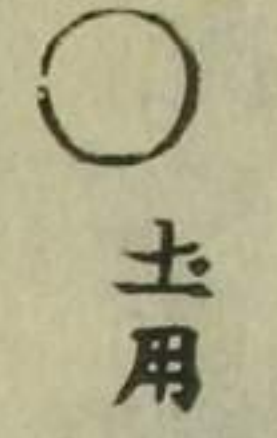
庚申



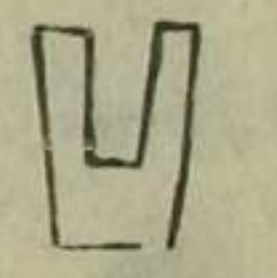
八十八夜



専



土用



地火



種
種マキヨシ

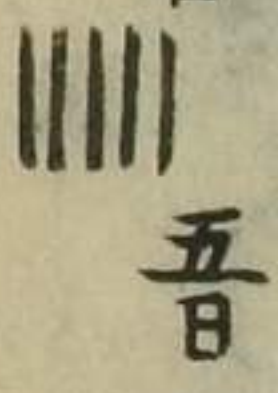


朔日

正月小



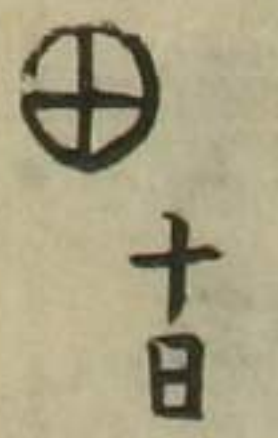
朔日



五日



九日

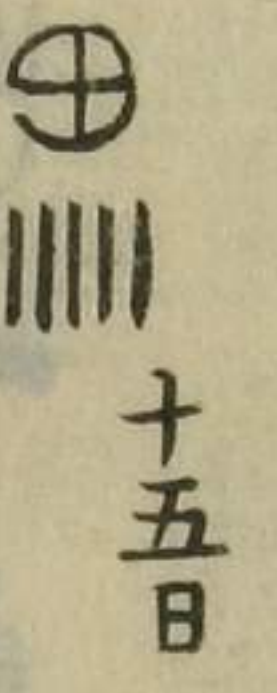


十日

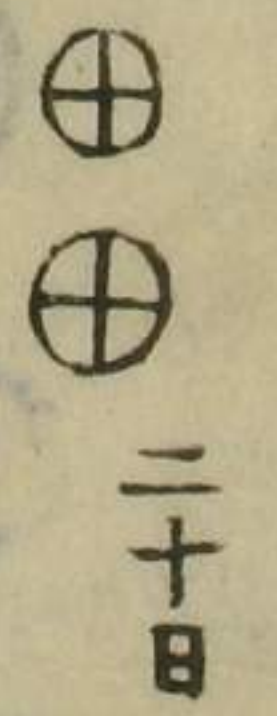


朔日

二月大



十五日

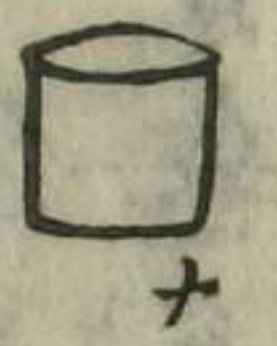


二十日

心經注解



眼心



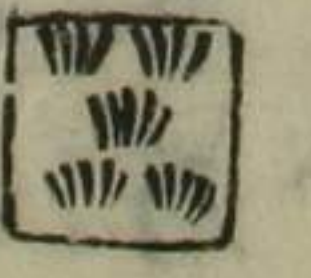
ナカワ



般若



孕



田



心



キヤウ

行人如此云々持虎云



棺



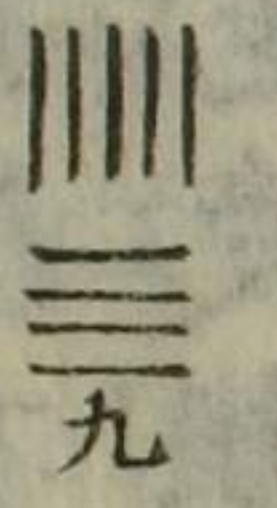
鋸
鋸ナリ
鋸ヲサイ
ト云



尾



尾



九



シキ
妻居



焼
焼焚



ヤカ又焚



僧



クモト云草アリ

心經原文

摩訶般若波羅密多心經觀自在菩薩行
 深般若波羅密多時照見五蘊皆空度一
 切苦厄舍利子色不異空空不異色色即
 是空空即是色受想行識亦復如是舍利
 子是諸法空相不生不滅不垢不淨不增
 不減是故空中無色無受想行色無眼界
 鼻舌身意無色聲香味觸法無眼界乃至
 無意識界無無明亦無無明盡乃至無老

死亦無老死盡無苦集滅道無智亦無得
 以無所得故菩提薩埵依般若波羅密多
 故心無罣礙無罣礙故無有恐怖遠離一
 切顛倒夢想究竟涅槃三世諸佛依般若
 波羅密多故得阿耨多羅三藐三菩提故
 知般若波羅密多是大神咒大明咒是無
 等等咒能除一切苦真實不虛故說般若
 波羅密多咒即說咒曰
 羯諦羯諦波羅羯諦波羅僧羯諦波羅僧
 羯諦菩提薩

婆訶 般若心經

大心經の本又し引合をく法べし是等の事以用ひて修
名を又事といはすこゝにさるる南部盛恩の城下より七
八十里と西にあつらるる田山村北より松山由一の邊鄙
かま減ふ古の結繩の約ととゆべし蝦夷地と云ふふ
文字無く本不刻と付く是等ととるるも是等の
ゆゑしてふかぬと東國との文華の格あつらふ
まゝ九州の心中よりは般若といはすこゝにさるる

時を信はし海峽の二首と多智ふりく古風とくなく
ごう事といはすべし危角日おらるる在りてとこ

菊菊嶺雪ニあす

天の丙午二月十八日金城後園平林とつ所瓜立を旦約
かし雷池をまゝり武屋余まて村上の城下をむけ雨の回を
あく是より馬池傳んともふ是より先ハ雪降るる是を
雜しといひてふは出づる二月末の事なまはつ小雪を
るははとるる是のまじりては社ののみといふは是を合
石自中から流かくハいさるるべしと疑ひたりせん
ぬくありしゆふ村とよりそ里猿沢の跡のまじりて

老保のつとをよきとせしむる先ハ雪を歩くとてなもすくいと
 行くとて今昔ハは雨ふ者一あつとていふ言はれんと又合を
 くの中を日中おとあつとてふ者よとていふ老保のいふ家おと
 めしとていふいふ言はれとていふ言はれとていふ言はれとていふ言はれと
 澤とハ後ハ武里の道がまじはハつとていふ言はれとていふ言はれと
 あぢぢとていふ言はれとていふ言はれとていふ言はれとていふ言はれと
 せしむる言はれとていふ言はれとていふ言はれとていふ言はれと
 本道計ハ人のいふ言はれとていふ言はれとていふ言はれとていふ言はれと
 せしむる言はれとていふ言はれとていふ言はれとていふ言はれと

こいせとていふ言はれとていふ言はれとていふ言はれとていふ言はれと
 入り揚げとていふ言はれとていふ言はれとていふ言はれとていふ言はれと
 雪ふるまふとていふ言はれとていふ言はれとていふ言はれとていふ言はれと
 合つとていふ言はれとていふ言はれとていふ言はれとていふ言はれと
 池澤とていふ言はれとていふ言はれとていふ言はれとていふ言はれと
 つらとていふ言はれとていふ言はれとていふ言はれとていふ言はれと
 全くとていふ言はれとていふ言はれとていふ言はれとていふ言はれと
 昔月かていふ言はれとていふ言はれとていふ言はれとていふ言はれと
 後ハ老保のつとをよきとせしむる先ハ雪を歩くとていふ言はれと
 うらとていふ言はれとていふ言はれとていふ言はれとていふ言はれと

十と後悔一なる先善あきて付くと後ハ湯と海
 ろい好ふありて宝氣と防ぐ不長より血の脈々ちんちんお夥おほる
 といハ今日夜に諸のさき入リ一府疵付ふくたり一が二三寸
 ハ血を凍りりらズ痛とと見えたり一ハ今湯水入り
 火亦あつてめく袖と血のちもあつたり一此の痕今中
 くおまろおけ夜はくさふ今日のおどかかくのど
 ぬりの道みちをまろおけおぬり信しんそ北地きたち中一の平ひらおぬり
 巴えんりある難がた便べんまろぬりん早はや天てん雪せつ凍こく雪ゆきさるる本ほん堂どう
 者もの城じやうやとハ紙しまべ一と羽うさく一と十九じゅうるすす船ふねを
 ぬりり立たおおき月つきを先まおき道みちといとぐ謝あやまりまししおお

丁ちやう教きやう丈ぢやうの横よこ雪ゆき山さん白はく泥でいとて他たもらびく樹じゆありんて
 けいさやあふたのさハ乃のとたらくしうすおとハアうと
 落お入いりのせきとぬりて程ほど多おほく頂いただきおむまりけりけり矢や伏ふしぬ
 神かみとて神かみ祠ひらあり此このさるる懐なつかからあやもやもや
 すくぬいそゆ神かみ祠ひらの後のちハ麓ふもと穴あなありぬ神かみ祠ひらの傍かたあり
 かりといひ麓ふもと穴あなのころありまろさこ後のち壁かべあり麓ふもと穴あな
 高たかサ二十丈餘にじゅうぢやうごありとてまろ麓ふもとのさるる古ふる本もとの松まつ枝えだ十じゅう年ねん
 ありふまろ松まつの梢しやう中ちゆうく忠ちゆうの宮みやありけり此このさるる海うみ小こ唐たう
 画えとるるてく弁べん施せはれり一雪ゆきハ一とまろりて海うみを
 氣き後のちありまろり中ちゆう村むら中ちゆう次じ荒あ川がは小こ股また小こ隅ぐもおの付つ

松堂藤雅則寫



成るる小清雪もやこぞとりてきけふのどらるるが
横たる雪を先いよと臨く杖丈小餘り村小
て事内中いひ小聲もはより雪又かゆりこ
踏めりて落入る年暇のどく 扱尾中といふ所のあふ
く大なる時と雪りまよりりる雪りるま餘阻りて下
るきおびし業内のもろ何きの節をひらんとたれ
ふら雪ふまよりて庭の谷庭へ落ぬ余まゆ小落きて
あうぐは侍とんと業内の人あもかやうらそあは
れ雪かかりふらふらふらいまききくは成踏付て小
ひらひら事うらうんとといひてそゆんとやうらに

はぐり落と中と飛とく雪のゆらふき町りり七こまの
落たりし小雪の埋おるあつ積へ落かやうとあつり
とていふと揚るうらととといふとともえははやく
とて指でゆけおまきと積下の谷野百田の切着りたま
やうりらまど又まきと落たるひしはゆり雪らん
ハ積はらうらいうもんととらうら力ま小積居たり一本の
指まかゆりゆらむやいる又雪のととまら落る小中程より
ハ背の方道松小あう落てゆく余積小の雪を居る同
は積ハ早先小落りりしとまきと人落まうとらはきと
まふけがうらまかゆりはあゆめまはは積とまきと

合ととの方紙はさるる雪山嶺のと小おひひのりきん
今やまきふしの底て合紙うーなりんうとふおひひ
あつとつとあくび又ま逆極ふまづりあふふ何の首座を
あまのふとく小あけつる谷座まーいふとこのとあるる
やうふえゆまは只ナダしの怒ろーく何とぞまきまきま
のましおんとまあま座座まらゆ小谷の座は谷川流ま
て歩む足の下小あを種まき岩手波のま福あままま
雪紙浩ぬさ谷川へあふん半ととおろまきまどまきま
もあふりまナダしのあふん半先あればあ後とるり足はこ
くともふばらうく小あう只まあふりまナダ作まきり

出とゆうく廣く人出川音とやまきまらう先合とまのいん
地とと替一休一あひあま樹二人一あまあうままきまらう
とほひぬまらう種まき屋敷といふあ付くあ付くあ付て
後あ人あま種とあるにま色土のこまきま軸棒まきま
かまら満ふ今日のらやう記事申くま山は書尽まきまあ
らま合紙保てまは是抑天脚まきまらまら熱ま書まはナ
しとらあまあり又アワといふあまらまら人の換するま
らいとくまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
雪ま中降時ま小山との木の梢まらあまらまらまらまら
アワ降くまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

小舟の藤ふむり此は山道のくく小舟をて落ちる是小舟の
 どの大木を根こき小舟を打悪敷色つらつら時人入ると
 小舟をけさるふいふ田あふとみぢん小舟碎かると時
 といは春の末小舟を地中より湯氣あふ小舟の杖は杖は杖は
 吾の下よりゆみけく山より下をたふふまはひ小舟の
 これとて遠の雪一團小舟をたふと川と谷と埋むる人
 るの御言又人あふとてなごまはる事ありとて是小舟を
 る者死をものにならぬ杖十丈の吾不運すきて雪降る
 すこは知る人なごは二ツハ花のくろくろくろくはひはひ
 小舟を居つらつら今日の気をもいひかとも肝をゆるらるるす

扱ひ表宿のま小け先も雪つらつらと回す先小舟股振英
 川やどつ所は小險阻ありて雪と亦深くと云扱ハいづせん
 小險阻ありて吾と又深くと云扱ハいづせんといふは吾は
 すぐ返るをんやあどと云いづらみく亭ま小舟を小
 亭まのつらつら先より北小岩川といふ所あり是(おま)
 間道あり是ハ海をこまは吾をてかー此を(おま)と云
 小舟雪の中なり扱ハ葡時ハ羽越の界して山の石を
 吾中あり四附とも旅人の縁儀をるお此時若は盗
 ともく旅人あふと殺害し今もは未のくもつ所也
 東遊記後編卷之一

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written on aged, yellowed paper and is enclosed within a rectangular border. The script is dense and appears to be a form of shorthand or a specific dialect. The text is oriented vertically on the page, reading from right to left. The paper shows signs of wear, including a large tear at the top edge and some discoloration. The text is written in a dark ink, possibly iron gall or a similar historical ink. The overall appearance is that of an antique manuscript or a historical record.



